

2021年6月

ゴールデンウィークが終わった頃から、私の地元では、ツバメが軒下の巣から出てきて飛び回るのをよく見かけるようになりました。巣作り・産卵の時期でもあります。無事に育ち、巣立っていけるよう見守りたいと思います。

今年は、例年よりもかなり早く梅雨入りしました。雨の日だからこそ家で読書をしてみませんか？今回、私がオススメする本は、『盲導犬クイールの一生』石黒謙吾著 秋元良平写真 文藝春秋 2001です。私が初めてこの盲導犬クイールを知ったのは学生の頃に観た映画でした。

クイールは、1986年に誕生したラブラドル・レトリバーで、盲導犬として訓練し、視聴覚障害者に寄り添って生活を送ります。しかし、2年後使用者が入院をすることになり、クイールは盲導犬訓練センターに戻って待機をすること3年、使用者は亡くなってしまい、使用者がいなくなってしまうクイールは盲導犬普及のためのデモンストレーション犬として4年間働きます。その後は、子犬の頃育ててもらったパピーウォーカー（将来盲導犬となる1歳未満の子犬を一般の家庭で飼育するボランティア）のもとで暮らします。クイールの生活には一つ一つドラマがあり、感動できるお話が詰まっています。

また、この本を読むと、日本での盲導犬の少なさがわかります。不足している問題は、主に3つあります。資金、盲導犬訓練士、盲導犬です。資金が不足している理由としては、育てるのに、一頭につき、300万円かかるということ。国からの助成金が不足しているし、寄付金も十分集まらないそうです。盲導犬訓練士の不足の理由は、希望者がいても、長い研修期間の間に辞めてしまう人が非常に多いということ。研修3年目の修了率は、12.7%なのだそうです。盲導犬の不足の理由は、育成期間が約1年半かかり、すべての候補犬がなれるわけではないからです。

海外と比べてみても、日本で活躍する盲導犬の少なさを改めて感じます。この本では、日本で実際に働いている盲導犬の数は850頭（1999年度・日本盲人社会福祉施設協議会調べ）、アメリカでは約6000頭、英国では約4000頭と記載されています。最近のデータとして、日本補助犬協会（2019年10月）によると、日本で実際に働いている盲導犬の数は928頭で、アメリカは約1万頭、イギリスでは4700頭となっています。20年経過しても海外の頭数にはまだまだ及んでいないことがわかります。「盲導犬だけでなく、耳の不自由な人を導く聴導犬、身体的障害者をもつ人を助ける介助犬、心を癒やしてくれるセラピードッグなど、人を助ける“アシスタンスドッグ”全体に対する理解と育成のための協力がますます必要になってくる」と著者の石黒謙吾さんがおっしゃるように、補助犬の育成に関わる仕組みを確立しなければならないと感じます。ちなみに、日本補助犬協会によると、日本の介助犬は61頭、聴導犬は67頭です。

この本で書かれていた、「GO!」と指示されても“行かない”ことが盲導犬にとっていかに大切なのがわかります。それは、言われた通りに盲導犬が動いてしまうと、車の通る危険な道でも進んでしまうからです。そのため、自分で考えて行動する能力が求められているのです。犬に“自分で考えて行動する能力”を身につけさせるには、並大抵のことではないと感じます。盲導犬訓練士・盲導犬ともに大変な努力が必要になることが想像できます。生まれの親・パピーウォーカー・盲導犬訓練士の人材確保はもちろんのこと、資金不足を解消できるような制度を整備する必要があると考えます。盲導犬育成で実績がある、アメリカ・イギリスへの視察などを行い、日本でも取り組める部分は積極的にみならしてほしいと思います

この本を読んで、自分には何ができるだろうかと気づいてくれると嬉しいです。盲導犬は、角・段差・障害物を使用者に知らせるわけですが、点字ブロックに自転車などを止めないなど自分でもできることがあります。あと、駅のホームドアが一刻も早く、全ての駅に設置されることを願います。

ちなみに、図書館のカウンターには、以前から兵庫盲導犬協会の募金箱が置いてあります。もし、気になった人、興味を持った人がいれば、募金にご参加いただくと幸いです。

